学び、備える「減災運動会」

特集 ～競技を通して"もしも"のときに役立つ知識を学ぶ～

さくら市社会福祉協議会・東北福祉大学学生生活支援センターの協動

大地震や豪雨などの天災は、人間の力では防ぎようがない。しかし、災害による被害は、地域住民の日頃の努力で最小限に食い止めることができる。「自助」はもとより「共助」の精神が被害を軽減する大きな力となることを念頭に、さまざまな競技を通して減災について学び備えるため、子どもから高齢者まで、地域住民が主役の減災運動会が開催された。

平成24年11月26日（月）、さくら市立喜連川小学校の体育館を会場に、同校及び東北福祉大学学生生活支援センターの協力によりさくら市社会福祉協議会主催の「減災運動会」が開催された。

今回は、昨年開催された上松山小学校に続く2回目。当日は6年生とその保護者合わせて約90名と、地域の高齢者約30名、喜連川小学校の教職員が参加。「みんな一緒、避難リレー！」、「準備はできた？災害時借り物競走」、「災害時○×クイズ」の各競技が行われ、東北福祉大学の学生21名が競技の進行をサポートした。

さくら市社会福祉協議会の鈴木稔夫事務局長はこう話す。

「自然災害は防ぎようがありませんが、地域住民の共助により、二次的な被害を減らすことは可能です」

東日本大震災を経験し、学校で行われる避難訓練がより災害時を想定できるようにしたことも、同運動会に取り組む大きな理由となった。

運営をサポートする東北福祉大学との縁は、鈴木事務局長及び瀧澤照子支部長が卒業生だったことから。東日本大震災が起きる前から、双方は視察研修や災害ボランティア養成講座等で協力関係にあり、震災後はさくら市社協から被災地の社協に支援物資を送るなど、共に助け合ってきた。

こうした取り組みが減災運動会につながり、また、「防災・減災及びボランティア活動に関する相互支援協定」の締結に結び付く。遠く離れた県外の機関との相互支援の取り決めは、災害のリスク軽減という意味合いも大きい。

ちなみに同運動会は、来年もまた、市内の別の小学校で開催される予定だ。

揃いのジャンパー姿で運動会の進行をサポートする学生たち

競技01 みんな一緒 避難リレー！

リレー競技を通して、車いすの使い方や、要援護者との避難方法について学ぶ

車いすに乗った高齢者がスプーンを持ち、ピンポン球を落とさないようゴールまで走る（要援護者と避難）

コース途中には、体操マットや三角コーンなどの障害物があちこちに

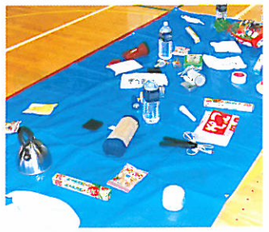
競技前に学生スタッフが車いすの操作方法や押し方を解説

競技02 準備はできた？災害時借り物競走

1日に最低限必要な飲食物の種類・分量を知り、災害発生時に必要なものを選ぶ

メモに書かれている品物をリュックの中へ。

リュックに入れた品物とメモの内容をチェック。間違いがなければゴールへ


水や食料などのほか、災害発生時に必要なアイテムがずらり

競技03 災害時○×クイズ

災害時における正しい行動を、地震・津波・避難等のクイズを通して学ぶ

「地震・津波編」「避難・避難生活編」など、いざというとき役立つ問題を出題

減災運動会・参加者の声

鈴木 良光さん（77歳）
競技を楽しみつつ、減災についても学べるなど、大きな収穫でした。同時に、互いに助け合うことの大切さを学びました。

清水 乃綾（のあ）さん（11歳）
○×クイズに出題された「災害用伝言ダイヤル171」のこと、家に帰ったら早速、両親に教えてあげたいと思います。

相互支援協定の主な内容

防災・減災及びボランティア活動に関するさまざまな取り組み

- 01 情報サイトの共有と相互利用
- 02 人材の育成と活動支援
- 03 イベントの開催・後援等の支援
- 04 各種事業における講師の派遣
- 05 調査・研究・教材等の作成
- 06 災害時のボランティア活動等の協力・支援

さくら市社協と東北福祉大学が、ボランティア支援協定を締結

先に触れたように、かねてより交流のあったさくら市社協と東北福祉大学は、災害時のボランティア活動等の連携・協力関係を推進するため、「防災・減災及びボランティア活動に関する相互支援協定」を締結した。

減災運動会の終了後、同小学校の会議室で行われた締結式には、双方の関係者ほか、人見健次市長や市議会議員らが出席。田中耕一同社協会長と福富哲也同大学教授・学生生活支援センター長が協定書に調印し、固い握手を交わした。

田中耕一会長（左）と福富哲也教授（右）